

[書 評]

現代モンゴル遊牧民の民族誌

— ポスト社会主義を生きる —

[風戸真理著, 2009 年, 世界思想社, xii + 322 頁, 5200 円 + 税。]

佐 川 徹

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究員)

本書は、約 70 年に及ぶ社会主義時代を経て、1990 年代から市場経済化・民主化への移行が進むモンゴル国に暮らす遊牧民の生活の変化と持続を明らかにした著作である。著者は、1994 年から合計 450 日間にわたってモンゴル各地での調査を続け、激動する遊牧社会の様子を観察し、またその変化をみずから体験してきた。

さっそく内容を紹介していこう。本書は序章に続く 3 部構成となっている。序章「現代モンゴル遊牧民の民族誌へむけて」では、関連する三つの先行研究の中での本書の位置づけが示される。牧畜に関する人類学的研究としては、遊牧民の放牧技術や家畜観などに見て取れるモンゴルにおける人間と家畜の関係性の特徴を、とくに東アフリカ牧畜社会との比較の観点から明らかにすることが、本書の目的とされる。モンゴル牧畜社会に関する研究としては、先行研究では見過ごされてきたミクロな牧畜技術や社会関係に焦点を当てることで、社会主義的近代化や市場経済化にともなって起きた社会変化を、「ふつう」の人びとの語りと実践に依拠して描き出すことが目的である。社会主義やポスト社会主義に関する研究の文脈では、社会主義社会を「日常のモラルの共同体」と捉えるクリス・ハンの

視点に依拠して、「モンゴルの一般の人びとすなわち牧民」(p.12) にとって、社会主義とその後の移行過程がいかなる経験であったのかを示すことが目的となる。

第 1 部「二〇世紀のモンゴル—変化する国家体制のもとでの遊動的牧畜」は、三つの章により構成されている。第 1 章「遊牧民の暮らしと変化」では、遊牧民の生活に多大な影響を与えてきたモンゴルの牧畜政策の変化が概観される。変化の時期を大まかに区分すると、個人世帯が牧畜経営の主体だった 1950 年代末までの「ネグデル期以前」、社会主義体制下で牧畜経営の集団化が進んだ 1950 年代末～1980 年代末の「ネグデル期」、1990 年代以降の「市場経済化期」の三つとなる。ネグデルとは、社会主義時代に郡単位で設けられた牧畜生産協同組合のことであり、遊牧民はその組合員として組織され、家畜や土地はその共有財産とされた。人びとは「ネグデル期」にはネグデルの共有家畜を預託管理し、それに対する給料を得て生活していたが、「市場経済化期」になると家畜や土地が私有化され自律的な牧畜経営に復帰した。

第 2 章「現代モンゴル遊牧地域」では、モンゴルの行政組織や自然環境と生業の概要、著者の四つの調査地の特徴が示される。モン

ゴルには、政府機関や店舗が集中した「定住区」とその周囲に広がり遊牧が営まれる「草原」がある。著者は、年間を通じて草原で遊牧に携わっている世帯を「牧畜世帯」と呼ぶ。もっとも牧畜世帯であっても、子供が学校に通う時期などには定住区付近の草原に移動しており、その遊動戦略は近代的要因から強く影響を受けている。

第3章「離合集散する遊牧民と世話のやける家畜たち」では、1990年代後半のアルハンガイ県チョロト郡で、牧畜という生業の核となる家畜の放牧がいかにおこなわれていたのかを、精緻な観察データから明らかにしている。家畜は性別や成長段階のちがいに応じた群れに分けて管理する必要がある、その放牧には多くの労働力が必要となる。そこで人びとは、居住集団内で日帰り放牧を当番制にしたり、異なる発展サイクルにある世帯が家畜を相互に預受託することによって、労働を合理化し人手不足の問題を解消している。またモンゴルでは、東アフリカ牧畜社会と比べて、牧夫が放牧の際に群を管理するための介入を頻繁におこなっている。その背景には、人びとが離合集散をくり返し放牧群の構成が変化しやすいため群にまとまりが生じにくく、放牧時に他の放牧群と混交しやすいという実際的な問題に加えて、家畜を「頼りない」存在として捉えるモンゴル遊牧民に独自の家畜観が存在しているという。

第Ⅱ部「分配された牧畜資本—社会主義から市場経済への移行」では、まず第4章「協同組合の解体とその後の模索」において、ネグデル期に共有化された家畜などが、1990年代初頭からのネグデル解体期に私有化された過程を、ドルノト県バヤンドン郡の元ネグデル幹部らの証言から描いている。共有化されていた財の国民への分配は、資本投資の権利書＝バウチャーの配分という形をとった。もっとも、ネグデル解体によって牧畜経営の単位が個別世帯に完全に分割されたわけではなく、市場経済化へのバッファとして地域ご

とに企業体が形成された。しかし、それらは旧態依然の経営方式がたたり、まもなくその活動を終えた。政府は、現在でも協同組合の形成を遊牧民に促しているが、人びとは上からの協同化が自分たちの生活の悪化を招くことを過去の経験から学び、各世帯の自律性に重きを置いた牧畜経営をおこなっている。

第5章「土地私有化政策とローカルな実践」では、市場経済化以降の土地私有化政策が、ザブハン県テルメン郡に暮らす遊牧民の生業に与えた影響を、モンゴルで牧畜を営むうえでもっとも重要な冬用キャンプ地の利用に焦点を当てて明らかにしている。冬用キャンプ地は、冬場の居住地や放牧地、草刈り場として多面的な機能を果たしている。とくに、家畜の糞尿が堆積してできたボーツと呼ばれる場所は、家畜を寒さから守ってくれる寝場所として不可欠である。ボーツは何世代にもわたる牧畜の実践をとおして生み出された「歴史的ストック」であり、売り買いできるものではない。実際、遊牧民は法的権利の固定化が進展しているにもかかわらず、実践レベルでは長年共同して生活してきた人びととの社会関係を尊重して、今日まで柔軟な土地利用を維持している。その結果、市場経済化以降も、日常的な生業実践は国家の法的権利と在来の慣行がせめぎあう中で展開している。

第Ⅲ部「遊牧社会の変化と連続—激動の時代のなかで遊牧民として生きる」では、最初に第6章「遊牧民にとって家畜とはなにか」で、ドンドゴビ県デレン郡の遊牧民を対象に、国家体制の変化にともなう家畜に対する認識の変化と持続を検討している。ネグデル期には、ネグデルが所有する共有家畜と、個人が所有する私有家畜という二つの範疇の家畜が存在した。遊牧民は、管理を預託された共有家畜は他個体や現金と交換可能なものと認識していたのに対して、私有家畜は個体識別をしてその一部とは「特別な関係」(p. 218)を取り結び、他個体と代替できない「単独性」を付与していた。市場経済化によって大部分

の家畜が私有化された今日でも、一部の個体にはネグデル期同様に特別な意味が付与されている。ただし家畜の個性性が強く表れすぎると、感情移入が起きやすくなり「商品化」が困難となるため、人びとは意識的に名前を付ける個体を限定している。また人びとは、家畜が自然災害に脆弱なことを認識しながらも、長年にわたる経験をとおして家畜の再生産力を信頼し、市場経済化期にも生業としての牧畜を継続していこうとしている。

第7章「現代に生きる遊牧民」では、ドンドゴビ県デレン郡を対象に、生活の便宜に合わせて新たな居住地と生計手段を求め、頻繁に移動する人びとの姿が描かれる。人びとは移動しながらも、親族やかつての隣人との協力関係を保ちながら世帯経営を維持している。たとえば、定住区世帯は子供を放牧労働力として草原世帯に提供するのに対して、草原世帯の成員は町へ用事で出向いたときに定住区世帯の世話になる。こういった草原と居住区間の移動や相互依存は、かつてからおこなわれていたが、海外への出稼ぎが頻繁になったことが近年の特徴である。開発機関などは、市場経済化にともない必要な技術を持たない牧畜への新規参入者が増えていることを問題視しているが、著者は草原と定住区の境界はそもそもあいまいであり、「新規参入者」が必ずしも牧畜に関する技術を持たない人ではないことを指摘する。

終章「遊牧社会が経験した社会主義とポスト社会主義」では、現代のモンゴル遊牧民の生活が、家畜の個性性への着目に代表される「プロト牧畜文化」、社会主義時代の近代化の経験、市場経済期のグローバル化とローカルな価値のせめぎあい、という三つの歴史の層の上に成立していることがまとめられるとともに、人びとが機会主義的な生存戦略をとおして今日まで遊動的な生活を続けてきたことを指摘して、論を閉じている。

本書は、今西錦司以来続く日本人人類学者

によるユニークな牧畜文化研究の伝統を継承しながら、激動する現代史の只中に置かれた遊牧民の生存戦略を詳細に解明した意欲的な著作である。とくに、社会主義時代の経験だけではなく、現在進行中の市場経済化期の変化を粘り強い調査によって多面的に明らかにしている点は、「一政権前まで」に起きた変化に焦点を絞りがちな他の社会変容の研究に比べて、高く評価されるべき点だろう。ただし、全体を通読して気になった点があったので以下に二つ挙げておこう。

著者は、「はじめに」で本書が「欧米の人類学者」によるモンゴル研究とは「質の異なる関係性に立脚した」、「アジア人によるアジアの研究であることに大きな意義がある」(iv)と記している。これはナイーヴな記述として批判の対象ともなるだろうが、評者は、モンゴルでの本格的調査を始めてからの時間を、「生きることとモンゴルにコミットすることとの重なり部分が拡大する過程であった」(p.16)と記す著者の対象への関わりへの深さは、本文中に時おり顔を出すフィールドワーク時の率直な心象の記述や、調査地の印象的な場面を写し取った多くの写真から伺いしることができた。それだけに終章で、著者の到達したモンゴル理解が、「欧米の人類学者」やほかの「アジア人」の理解と比べて、具体的にどのような差異を有しているのかに触れられていないのは残念である。

もう一点違和感を抱いたのは、調査対象地域の代表性の問題である。モンゴルには「森林性草原」、「草原」、「砂漠性草原」という三つの地域区分があり (p.59), 27のエスニック集団が存在しているが (p.286), 本書ではこの地理的・民族的差異が国家との関係のちがいなどにどう対応している／いないのかは、ほとんど検討されていない。社会主義時代に、生活の画一化を進める「ネグデル化」政策が実施されたため、全国民がその政策をとおして共通の経験をしたという背景がある (p.75)にしても、そのような差異を検討することが

ないままに、各章で明らかにした特定地域の特徴が、「モンゴルの一般の人びとすなわち牧民」すべてに適用可能であるかのように思わせる記述が終章でなされている点は、評者にはやや早急に感じられた。

もっとも、モンゴル研究の文脈からのコメントにはよりふさわしい論者がいるだろう。そこでつぎに、評者が調査対象とする東アフリカ牧畜社会との比較の観点から考えた点を指摘しよう。

まず、モンゴル人が他者からの申し出を拒否あるいは黙認する意思を示す際に用いる「自分こそが知れ」(vi)というフレーズは、東アフリカ牧畜民研究でしばしば指摘される「独立志向シンドローム」や「個人主義的性向」と響きあう。また、それと重なるように第4章で指摘される世帯経済の「自律性」を重んじるモンゴル牧畜民の性向は、東アフリカ牧畜民研究の重鎮スペンサーが、牧畜経営を「家族企業 (family enterprise)」による営みとして特徴づけたことに通じる (Spencer 1998)。

不確実な環境下に生き、小規模な単位で家畜とともに移動しながら生活を続ける牧畜という生業様式や、その根底において牧夫個人と家畜との関係に依存して成立している放牧という営みの特徴が、これらの性向といかなる関連を有しているのかは、今後議論を深める余地があるだろう。著者は、本書で明らかにしたモンゴル遊牧民の生存戦略の特徴を、菅原和孝がブッシュマンについて述べた「楽観的現実主義と日和見主義」の組み合わせ、ということばに帰着させているが、この性向と関連させながら著者自身のことばでそれを特徴づけることもできるのではないか。

また、著者が草原と定住区との頻繁な往来について強調したり、都市への出稼ぎ者との関係が牧畜世帯の維持にも重要な役割を果たしていると指摘している点は興味深い。牧畜を他の生業との連続性の中に位置付けたり、

都市化や貧困世帯の増加にともない村落と都市との関係に注目する必要性は、東アフリカでも高まっているからである。ただし著者が、居住地や生業の流動性を強調して、「人びとは、チャンスがあれば、そしてよりよい生活のためならば何でも手放してどこへでも行く」(p. 256)と記した点には、留保が必要ではないだろうか。もし本当に「何でも手放して」しまうならば、本書で明らかにした、激動の歴史を越えて持続してきた人間と家畜の濃密な関係とはなんだったのか。むしろ評者は、牧畜セクターと非牧畜セクターとの経済的・社会的な相互依存関係に関するより継続的な調査をおこなって、人びとが「どこへでも行く」際に、中長期的に何を手放し、また何を手放していないのかを実証的に明らかにすることがまず必要だと考えたが、どうだろうか。

近年になって、牧畜社会にマクロな政治・経済動態がもたらした影響を主題とした民族誌が日本語でも数冊出版されている。本誌第42号に掲載された谷泰 (1976) の記念碑的論文から30年以上を経た今日、国家や市場との現代的関係をその分析枠組みに包摂した新たな「牧畜文化論」を議論する時期が熟しつつあるようだ。著者が用いる「プロト牧畜文化的な人間—家畜関係」(p. 260)ということばには、本質主義的危うさがともなうが、明確な定義をした上で用いれば、特定地域を越えた牧畜社会と外部世界の関係の共通性を検討する際の一つの出発点となるだろう。すでに本書で東アフリカ牧畜社会との比較に取り組んだ著者のさらなる活躍を期待したい。

参考文献

- 谷泰 1976 「牧畜文化考」、『人文學報』42: 1-58。
 Spencer, P 1998 *The Pastoral Continuum*.
 Oxford, Clarendon Press.